

まごころだより

2019. 7月号

“本当は自分でやりたい”

介護を必要とする人の場合は「できる事を自分の意思でやらない」のではなく「したいという意思があるけど、できない」ということじゃないかと思います。その人の「意思」としては、自分で料理がしたい、自分でトイレに行きたい、自分で買い物に行きたい、自由に外を歩きたい。こんなふうに思っているのでしょうかね。

しかし、老いや病気により体の自由が効かない、手が動かない、トイレに着くまで止めておくことができない。この際にどうしようもなくなって介護を利用することになるのでしょうか。

今介護を必要としている高齢の方を見てみると特に自分を律する事が善とされてきた世の中を過ごしてきた方が大半だと思います。

もしかしたら「誰かの手を借りないと生活できない」という生活になって戸惑っておられるかもしれません。



“楽しみを持つ”

介護をする人は一生懸命、介護してくれるので文句はない。でも正直何をすればいいかわからない。全身麻痺で体が動かないとしても、人間が持つ感覚である「暇」は感じる、体を動かす事が出来ないと何もできないけど、何をすればいいのかわからないテレビをつけたり、ドライブに行ったり、車いすに乗って一緒に散歩に出かけて気分転換をするなどの工夫によって、楽しみをもつことが大切ではないかと思えます。

認知症でなくても、高齢の方で介護を必要とする人は記憶の障害が起こりやすくなってきます。

若い人と比べ、脳のはたらきが低下する為、記憶がズッポリ抜け落ちてしまう事があるのでしょうか。また、脳の働きに衰えが無かったとしても、老眼や難聴等、五感の低下などもあります。

脳の記憶の低下や、五感の低下が始まっている人に、物を見せたり、何かを説明しても、その場は話が成り立ったとしても、本音では「よくわからない」という事を思っている人が多いのではないのでしょうか。話し掛けられたことに適当にこ





たえはするけど、結局なんのことなのかよくわからないと思っておられるのではないかと思います。

“ときどき先生とよばれる”

良い介護が出来たわけでもない、いつもそばにいて話し相手をしているわけでもない、それでも自分をわかっていただけているようです。

正しく会話の中で確認できたわけではありませんが、その人の行動や時折見せる単語をつなぎ合わせると、「お迎えもして、自分の話聞いてくれたり、話してくれる人で回りの人は・・・長とか呼ばれている人は先生」と思われている。わたしは先生ではありませんと言うのですが「そうですか、わかりました先生」と答えられます。なんだか小恥ずかしくなりました。

介護をする人が、色々な思いを持つように、介護を必要とする人が持つ本音も実に多種多様で高齢の方であれば、介護を

必要としたとき人生の終盤に差し掛かっている事もあるため、相手の本音を聴きつつ、その人が望む最後のひと時を過ごしてもらう事も介護をしていくのであれば重要なポイントとなっていくかもしれません。

介護は人を生かす事も殺す事もできる、とても力のある行いです。

その測り知れなく強い力を生かすも殺すも介護者である人の相手への理解と聴く力にかかっているのかもしれない。



7月行事の予定

3日	(水)	小物づくり
10日	(水)	民謡・三味線
11日	(木)	林夫妻の歌謡ショー
15日	(月)	惣菜またはお菓子づくり
22日	(月)	ハーモニカ伴奏で歌いましょう
26日	(金)	ピアノ伴奏で一緒に唄を
29日	(月)	食事会